

岩手方言における形容詞の特徴

—活用体系と音声文法の視点から—

齋藤孝滋

キーワード 岩手方言、活用体系、母音無声化、語中子音有声化、語幹統一

1、はじめに

本稿では、北奥方言地域と南奥方言地域にまたがり、言語的にヴァリエーションに富む岩手方言における形容詞について、活用体系的視点と、音声文法的視点（具体的には、「連母音融合と語幹の形式」、「母音無声化規則と語中子音有声化規則による語幹統一の力との関係」）から述べることとする。

岩手方言は、まず北奥方言と南奥羽方言の境界線により、「中北部方言地域」（旧南部藩領）と「南部方言地域」（旧伊達藩領）に大区画され、さらに、前者は「北部方言地域」と「中北部方言地域」及び「沿岸方言地域」に小区画され、結果として4つの方言地域に区画される（本堂寛1982）。本稿では、北部方言地域より二戸郡安代町方言、中部方言地域より盛岡市方言、沿岸方言地域より久慈市方言、南部方言地域より一関市方言をとりあげ、老年層のくつろぎ場面（「当該地域出身の親しい同年代の友人（同性）とくつろいで話す場面」）における発話を対象として取り上げることとする（注1）。

2、各方言における形容詞活用体系

2・1、活用体系の設定法と活用体系表

本稿で提示する形容詞活用体系の体系設定法及び表記に際しては、知的意味の弁別レベルである音韻表記を採用することとする（注2）。

各方言の形容詞活用体系は、語幹末尾母音と活用語尾のパターンから、表1～表4のように設定される。形容詞の種類、活用形の種類とも、一箇所でも他

岩手方言における形容詞の特徴—活用体系と音声文法の視点から—

の活用形と異なる部分があれば、統合せずに、別種として設定することとする。
語幹を二つ持つ形容詞については、優勢な語幹の末尾母音により位置づけることとする。

表 1. 岩手県安代町方言形容詞活用体系表

種類	末尾	語例	語幹 活用語尾	1	2	3	4	5	所属語例	
1	(1a)	u1	恥ずかしい	sjoosu	u	u	gu	ku	gaQ	suzusuu (涼しい)、jagamasuu (うるさい)
	(1b)	u2	低い	higu	'e	'e	gu	ku	gaQ	sabu'e (寒い)、
2	(2)	e	良い	'e	e	e	gu	ku	gaQ	
3	(3a)	e o	黒い	kure kuro	e 'e	— 'e	— gu	— ku	— gaQ	hiro'e (広い)、suro'e (白い)
	(3b)	o	遠い	too	'e	'e	gu	ku	gaQ	ko'e (濃い)
4	(5)	ε	高い	tage	ε	ε	—	—	gaQ	'aseε (浅い)、sjoQpεε (しょっぱい) 'oQkanεε (恐ろしい)、hukεεε (深い)
		a		taga	—	—	gu	ku	—	
主な接続形式				{∅} (言い切り) 体言 ~ba (ば) ~be (べ)	no (の)	nεε (ない) naru (なる)	te (て)	ta (た) tara (たら)		

(*) 「—」は、「あきま」を表す

表 2. 岩手県久慈市方言形容詞活用体系表

種類	末尾	語例	語幹 活用語尾	1	2	3	4	5	所属語例	
1	(1a)	u1	恥ずかしい	soosu	u	gu	ku	gaQ	ga	suzusuu (涼しい)
	(1b)	u2	低い	higu	'e	gu	ku	gaQ	ga	samu'e (寒い)
2	(2)	e	良い	'e	e	gu	ku	gaQ	ga	
3	(3)	e	遠い	too	'e	gu	ku	gaQ	ga	ko'e (濃い) kuro'e (黒い)
4	(4)	ε	高い	tage	ε	—	—	—	—	'aseε (浅い)
		a		taga	—	gu	ku	gaQ	ga	
主な接続形式				{∅} (言い切り) 体言 no (の) ba (ば)	nεε (ない) naru (なる) suru (する)	te (て)	ta (た) tara (たら)	bjaa (だろう)		

(*) 「—」は、「あきま」を表す

表3. 岩手県盛岡市方言形容詞活用体系表

種類	末尾	語例	語幹 / 活用語尾	1	2	3	4	5	所属語例	
1	(1a)	u	恥ずかしい	'osjosu	u	gu	gu	ku	gaQ	suzusuu (涼しい)、samuu (寒い)、ko'josuu (なつかしい)
	(1b)	u e	低い	higu hige	u e	gu gu	gu —	ku —	gaQ gaQ	
2	(2a)	e	良い	'e	e	gu	gu	ku	gaQ	
	(2b)	e o	黒い	kure kuro	e —	gu gu	gu —	ku —	gaQ —	hiree (広い)、suree (白い)
3	(3)	o	遠い	too	'e	gu	gu	ku	gaQ	ko'e (濃い)
4	(4a)	ε	浅い	'ase	ε	gu	gu	ku	gaQ	'ageε (赤い)
	(4b)	ε a	高い	tage taga	ε —	gu —	gu gu	ku —	gaQ —	
主な接続形式				{φ} (言い切り) 体言 no (の) ~ba (ば) ~bee (べー)	nεε (ない)	naru (なる)	te (て)	ta (た) tara (たら)		

(*) 「—」は、「あきま」を表す

表4. 岩手県一関市舞川方言形容詞活用体系表

種類	末尾	語例	語幹 / 活用語尾	1	2	3	4	5	所属語例	
1	(1)	u	恥ずかしい	'osjosu	u	gu	ku	gaQ	gaN	suZusuu (涼しい)
2	(2a)	e1	良い	'e	e	gu	ku	gaQ	gaN	
	(2b)	e2	低い	hige higu	e —	gu gu	ku ku	gaQ gaQ	gaN gaN	samee (寒い)
	(2c)	e3	黒い	kure kuro	e —	gu gu	ku ku	gaQ gaQ	gaN gaN	hiree (広い)
3	(3)	o	遠い	too	'e	gu	ku	gaQ	gaN	ko'e (濃い)
4	(4)	ε a	高い	tage taga	ε —	— gu	— ku	gaQ —	gaN —	'aseε (浅い)
主な接続形式				{φ} (言い切り) 体言 no (の) ba (ば)	nεε (ない) naru (なる) suru (する)	te (て)	ta (た) tara (たら)	bee (べー)		

(*) 「—」は、「あきま」を表す

2・2、形容詞の種類

4方言とも、(優勢な)語幹末尾母音が、/u/である第1種、/e/である第2種、/o/である第3種、/ε/または/a/である第4種に分類される点で同様であるが、下位分類で異なる。

第1種は、「恥ずかしい」「低い」が、安代町方言と久慈市方言においては語幹が一つであるが、盛岡市方言においては「低い」の語幹が二つである。一関市方言においては「低い」は語幹が二つである点で盛岡市方言と同様であるが、優勢な語幹の末尾母音が/e/であることから第2種に分類される。

第2種は、4方言とも「良い」の語幹が/e/一つである点で、共通語との対応関係上特徴的であるといえる。盛岡市方言と一関市方言においては、本来の語幹末尾母音が/o/である「黒い」が、語幹を二つ持ち、優勢な語幹の末尾母音が/e/であることから、第2種に分類される。

第3種は、久慈市方言において「遠い」「黒い」が語幹が一つである点で共通語と同様である。他の3方言においても「遠い」は同様であるが、「黒い」について状況が異なる。「黒い」は、安代町において語幹が二つであり、盛岡市方言と一関市方言と異なり、優勢な語幹末尾母音が/o/であることからこの第3種に分類されるのである。

第4種は、4方言とも語幹が二つである点で共通するが、優勢な語幹の末尾母音が、安代町方言・盛岡市方言・一関市方言で/ε/であり、久慈市方言で/a/である点で異なり、共通語との対応上特徴的といえる。

2・3、活用形の種類

4方言とも、活用形の種類は五つであるが、活用語尾や、接続形式の接続パターンによる状況が異なる。

久慈市方言と一関市方言は、接続形式/bjaa/・/bee/ (推量)のみが接続する専用の活用形(活用語尾が/ga/・/gaN/である第5活用形)を持つが、安代町方言・盛岡市方言は持たない。

久慈市方言・盛岡市方言・一関市方言において、「∅ (言い切り)、体言、/no/ (準体助詞「の」)」は同一の活用形である第1活用形に接続するが、安代町方言においてのみ/no/の接続パターンが若干異なり、第1活用形とは別の第2活

用形に位置づけられる。

安代町方言・久慈市方言・一関市方言において、「/nεε/（打消助動詞「ない」）、/naru/（動詞「なる」）は、同一の活用形（安代町方言においては第3活用形、久慈市方言・一関市方言においては第2活用形）に接続するが、盛岡市方言においては、両者の接続パターンが若干異なり、別の活用形に位置づけられる。

四方言とも、/nεε/（打消助動詞「ない」）・/naru/（動詞「なる」）が接続する活用形と、/te/（接続助詞「て」）が接続する活用形が異なる点で共通語との対応上特徴的といえる。

3、形態レベルでの活用形の統合

3・1、/bee/類（/˜bee/・/˜be/・/bee/・/bjaa/）「推量」が接続する活用形と活用形の統合

久慈市方言と一関市方言は、/bee/類が接続する専用の活用形語尾/ga/<久慈市方言第5活用形語尾>、/gaN/<一関市方言第5活用形語尾>を持つが、安代町方言と盛岡市方言—は持たずに基本形でもある第1活用形に統合している。

3・2、/˜ba/類（/˜ba/・/ba/）「条件」が接続する活用形と活用形の統合

4方言とも、所謂条件形（活用形語尾*/kere/）が消滅し、基本形である第1活用形に統合している。

以上より、岩手方言における形態レベルでの活用形の統合は、共通語より進んでいるといえる。

4、音現象と形容詞活用体系

4・1、連母音融合と語幹の形式

一関市方言には、連母音融合/a'e/>/εε/、/o'e/>/ee/、/u'e/>/ee/が、基本形である第1活用形に規則的にみとめられる。注目すべきは、これらの融合が、「第1活用形の語幹をとろうとする語幹統一の類推」により、他の活用形にまで及んでいるという点である。ただし、この傾向は、今だ完全なものではなく、本来の語幹と、第1活用形の語幹が並存するという結果を招いているの

である（「高い」における/taga/と/tagε /、「黒い」における/kuro/と/kure/、「低い」における/higu/と/hige/）。この状況は、他の方言についても多かれ少なかれ存在する。

盛岡市方言は連母音融合/a'e/ > /ε ε /、/o'e/ > /ee/、/u'e/ > /ee/、/u'e/ > /uu/ がみられ、「高い」、「黒い」、「低い」については、本来の語幹と第1活用形の語幹が並存するものの、「浅い」においては、語幹が完全に第1活用形の語幹に統一されている点で注目される。「低い」において第1活用形に連母音融合のために生じた二つの語幹/higu/（/u'e/ > /uu/に由来）と/hige/（/u'e/ > /ee/）が並存する点も特徴的である。

安代町方言は「黒い」と「高い」に、久慈市方言は「高い」に、本来の語幹と、融合により生じた第1活用形の語幹が並存する。

4・2、母音無声化規則による語中子音有声化現象と語幹統一の力

これに関連して、まず、岩手方言における母音無声化規則（齋藤1992c）について述べておく。

音構造1、「無声C+狭V+無声C+（半）広V」

音構造2、「無声C+狭V+無声C+狭V」

「狭V」の無声化は、一般に、音構造が、共通語の音構造1に対応する場合に生じ、音構造2に対応する場合生じない（Cは子音、Vは母音を表す）という規則性を持つ。盛岡市方言と一関市方言の「低い」において、語幹末尾と活用語尾部分に連母音融合/u'e/ > /ee/が生ずることにより、音構造2の語幹(/higu/)の他に、音構造1の語幹(/hige/)が存在する。この場合、音構造1を持つ語幹において、母音無声化規則に反して「狭V」が無声化せず、直後の子音に語中子音有声化現象が生じているのである。これは、「語幹子音を統一しようとする力」により生じたと推定できるのである。

4・3、母音無声化規則による語中子音有声化現象と活用語尾統一の力

安代町方言の第3活用形、久慈市方言・一関市方言の第2活用形、盛岡市方言の第2・3活用形の場合、活用語尾の母音/u/には、直後の子音が有声子音（/nε ε /「ない<打ち消し>」、/naru/「なる<動詞>」）であるため、無声化は生

じない。従って、活用語尾の/k/は語中子音有声化現象が生じ/g/となるのである。一方、安代町方言の第4活用形、久慈市方言・一関市方言の第3活用形、盛岡市方言の第4活用形の場合は、/te/「て<接続助詞>」が接続し、活用語尾の母音/u/は、音構造一の「狭V」に該当することになり、無声化することが期待される。論理的に「活用語尾の経済性」の視点に立てば、活用語尾の/u/に母音無声化規則が適用されずに、/k/に語中子音有声化規則が適用され/gu/となれば、4方言の該当活用形は、/nεε/「ない」、/naru/「なる」が接続する活用形に合流し経済的である。しかし、実際には母音無声化規則が優先し、活用語尾が/ku/となるためこの合流は生じないのである。

以上より、形容詞における「活用語尾の統一の力」は、岩手方言においてはみとめられないのである。

[注]

- 1、話者を含めた調査の詳細は、齋藤（2001a、b、c、d、2002a）等を参照されたい。
- 2、本稿で対象とする方言はすべて、予め音韻分析をおこなっている。方言の音韻体系設定の方法には、現代話者の先に述べたような場面設定における発話資料を対象としつつも、見出される規則的傾向から外れる例外的語例を分析対象から除き、過去のある時点で存在したと推定される音韻体系を見出そうとする通時的体系設定<D体系>と、使用語なら例外なく対象とする純共時的体系設定<S体系>があり、両者は、研究の目的に応じて採用されるべきものと考えられる。この問題については齋藤（1987）で論じているが、さらに「話者の弁別能力」の視点から、両者の特徴を述べれば、後者<S体系>は、現存する話者自身の弁別能力を完全に反映しているが、前者<D体系>は、必ずしもそうとはいえないという点が指摘できよう。この体系設定の違いは、語中子音有声化現象の解釈（齋藤1987）に関わり、本稿の形容詞活用体系において、安代町方言における第3活用形と第4活用形、盛岡市方言における第2・第3活用形と第4活用形、久慈市方言と一関市方言における第2活用形と第3活用形を別個に設定するか否かという問題に直接的に関わるのである。即ち、D体系では同一活用形に設定され、S体系では別個の活用形に設定されることになり、活用形の数の問題に影響することになる。本稿及び筆者の一連の研究では、話者の弁別能力を重視し、S体系を採用している（齋藤 1992a、b、2001a、e、2002c）。

文献

- 齋藤孝滋 1978 「語中における子音の有声化現象」の音韻論的解釈について—岩手方言を中心にして—『語文論叢』第15号
- 同 1992a 「岩手県一関市舞川方言の音韻」『日本文化研究所研究報告』別巻29集
- 同 1992b 「岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象—言語内的・外的要因の観点から—」『国語学』第168号
- 同 1992c 「母音無声化の「広さ」と「強さ」—岩手方言を中心にして—」『国語学研究』第31号
- 同 2001a 『岩手県のことば』（平山輝男他編）明治書院
- 同 2001b 「岩手県久慈市方言の形容詞活用体系」『都大論究』38号
- 同 2001c 「岩手県一関市方言における形容詞の活用体系」『フェリス女学院大学文学部紀要』36号
- 同 2001d 「岩手県安代町荒屋新町方言における形容詞活用体系」『言語と人間』5号
- 同 2001e 「岩手県久慈市方言の音韻」『日本文化研究』中国大連外国語学院
- 同 2002a 「岩手県盛岡市方言の形容詞活用体系」佐藤喜代治編『国語論究 9 現代の位相研究』明治書院
- 同 2002b 「東北・越後方言における/r/をめぐる音変化」（単著）『フェリス女学院大学文学部紀要』37号
- 同 2002c 「岩手県久慈市方言の音韻対応」『玉藻』第38号
- 本堂寛 1982 「8 岩手方言」『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会